

# 駐伊公使時代の田中不二麿と訪伊日本人たち

——明治中期における日本人政治家のイタリア〈観光〉——

鈴木栄樹

## Abstract

TANAKA Fujimaro, who is famous for his inspection of Western educational institutions as a member of the Iwakura Mission in the early Meiji era, held the post of the Japanese Minister to Italy from 1884 to 1887. In those days, some Japanese groups of inspectors to Europe visited Italy, and TANAKA gave assistance to them especially in Rome. Two Japanese statesmen, TANI Tateki, Minister of Agriculture and Commerce, and KURODA Kiyotaka, advisor to Cabinet, were among them. This paper is a preliminary study through their diaries on what and how they inspected in Italy. We will be able to understand some aspects of relationships between Japan and Italy in the mid-Meiji era.

**Keywords :** TANI Tateki, KURODA Kiyotaka, mid-Meiji, inspection, West

## はじめに

岩倉使節団の文部理事官として西洋諸国の教育制度の調査を行い、優れた報告書「理事功程」をまとめたことで知られる田中不二麿（1845/弘化2年～1909/明治42年）は、1884（明治17）年5月にイタリア公使を命ぜられ9月に赴任、その後、1887（明治20）年6月にフランス公使へ転任するまでの3年近くの間をローマで過ごした。

田中が在外公使を務めていた1880年代半ばから1890年頃は、日本国内では伊藤博文を中心に憲法制定、議会開設の準備作業が進められ、また井上・大隈両外相による条約改正交渉が試みられた時期でもある。そうした時代状況のなかにあって、この時期には、岩倉使節団派遣の際に実施された西洋諸国の視察につぐ第二の視察の波が訪れた。すなわち、1882年から翌年にかけての伊藤博文らの憲法調査について、大山巖をトップとする三浦梧楼・川上操六・桂太郎・野津道貫らの軍事視察団（1884年2月～1885年1月）、そして鳥尾小弥太（1886年2月～1887年2月）と本報告であつかう谷干城（1886年3月～1887年6月）・黒田清隆（1886年6月～1887年4月）、さらに西郷従道（1886年7月～1887年6月）・樺山資紀（1887年9月～1888年10月）・山県有朋（1888年12月～1889年10月）らの洋行があいついだ<sup>1)</sup>。そして、駐伊・駐仏公使としての田中は、その職務からして当然のことながら、彼らに対して種々の便宜をはかっている。

本報告では、谷干城・黒田清隆という2人の政治家—陸軍軍人でもある—の事例をとりあげ、

彼らの洋行日誌や田中宛／発書簡などの関係史料から、そのイタリア〈観光〉について紹介する。なお、ここでの〈観光〉は、『米欧回覧実紀』の巻頭に岩倉具視がこの二文字を掲げたように、他国のすぐれた制度・文物等の視察という意味で使用している。彼らによる〈観光〉の歴史的意義については、上記の諸視察の全体を把握したうえで、あらためて位置づけなおす必要があるが、とりあえず本報告では、そのことを念頭に置きつつ、今回のシンポジウムのテーマである「イタリア観の一世紀」のなかに位置づけてみたい。

\*以下に引用する史料には、適宜、句読点を付し、また〔 〕内に筆者の註を補った。また、外国の固有名詞のあとの〈 〉内に、参考のため、史料本文中の表記を示したところもある。

## 1. 田中不二麿および関係書簡について

まず、田中不二麿について、略歴を掲げておく<sup>2)</sup>。

田中は、尾張藩士の出自であり、幕末には田宮如雲・丹羽賢らとともに同藩の勤王派グループ金鉄組に加わり、藩論を佐幕から討幕へとまとめた。1867（慶応3）年の王政復古により参職、翌1868（明治元）年に徴士に任ぜられ、1869年には大学校御用掛に就き、教育行政に携わり始めた。ついで、廃藩置県後の1871年10月には、新設間もない文部省の大丞となり、同年11月から岩倉具視特命全権大使一行に文部理事官として随行、欧米の教育事情を調査し一渡米後、当時滞米中の新島襄が調査に協力一、1873年3月に帰国、視察の成果を「理事功程」15巻にまとめ、またアメリカからモルレー（David Murray）を文部省顧問（学監）として招いた。ついで1874年には文部大輔に任ぜられ、1877年、再び渡米して教育制度を調査し、「米国学校法」を訳出して文部省から刊行する。その後モルレーとともに1879年の教育令を制定したが、その「自由主義」性が非難され、1880年には司法卿へ転じて教育行政からは離れる。1881年10月、政変後に新設された参事院の副議長、さらに1884年にイタリア公使、ついで1887年にフランス公使へ転任、1890年6月に帰国すると枢密顧問官に任ぜられ、翌1891年6月には第1次松方正義内閣の司法大臣を1年ほど務めたのち、再び枢密顧問官として晩年を過ごした。なお、田中不二麿は、イタリアへの赴任にあたって須磨夫人（1850～1942）と子息の阿歌麿（1869～1944）をともなったようで、阿歌麿は、のちベルギー・スイスに留学、日本における湖沼学の先駆者となった。

明治期の政治家を中心とした人々から田中不二麿に宛てられた書簡約180通は、不二麿の曾孫田中久氏（当時、京都薬科大学学長・京都大学名誉教授）から1994年に京都大学文学部に寄贈された<sup>3)</sup>。ついで、新たに見出された書簡のうち、田中不二麿の没後、西園寺公望から須磨夫人に宛てられた書簡28通（2冊の書簡帖に表装済み）が、2004年、立命館大学に寄贈され<sup>4)</sup>、また、その後に見出された不二麿宛の100通ほどの書簡については、現在、報告者が整理中である<sup>5)</sup>。以下に紹介する田中不二麿宛の書簡は、いずれも京都大学文学部に寄贈されたものである。

## 2. 農商務大臣谷干城のイタリア

### 2.1 谷干城について

土佐藩士出身の谷干城（1837/天保6年～1911/明治44年）は、保守的・国粹的な思想から、同藩出身者で同世代の板垣退助や後藤象二郎らの民権運動に加わることはなかった。1877（明治10）年の西南戦争では、数十日にわたる熊本籠城によって政府軍の勝利に大きく貢献し、その功績によって、土佐藩出身者ではめずらしく陸軍中將にまで昇った。しかし、山県有朋（長州藩）を中心とする陸軍主流派と対抗し、鳥尾小弥太（長州藩）・三浦梧楼（長州藩）・曾我祐準（柳川藩）とともに陸軍の「四將軍」と呼ばれ、独自の政治的立場を持した。1884（明治17）年、学習院長に就任した谷は、1885（明治18）年12月、内閣制度への移行とともに第1次伊藤博文内閣の農商務大臣として入閣したものの、翌1886年2月、農商工業調査のため欧州へ派遣されることとなった<sup>6)</sup>。すでに前年（1885年）11月に鳥尾小弥太も欧州差遣を命ぜられ、谷より1か月早く、2月13日に横浜を発っている。

三宅雪嶺「同時代史」は、谷干城のこの洋行の一因として当時の農商務省内の事情にふれつつ、次のように記している<sup>7)</sup>。

谷が農商務大臣となりて日浅く、未だ何程も国務を見ず、早くも三月十三日、横浜を發し、歐洲視察の途に上れるは、伊藤首相の勧誘に出でたり。谷の入閣は薩長側にて其の才能を認めし所もあり、熊本籠城以来の人気を察せし所もあり、薩長の緩和剤に適當せし所もあるが、実は農商務省に力を伸ばすを望まず、吉田〔清成、薩摩藩出身〕次官の為すが儘にせんことを望めり。〔中略〕吉田は欧米の産業に関して新知識に富み、何人にも下るべきを覺えず。谷と語りて甚だしく距離あり、相ひ共にするに難く、伊藤は之を聞いて谷に洋行を勧めたるなり。

谷の洋行には、柴四朗・道家齊・奥青輔・樋田魯一・村田某らの農商務省官吏が随行した（奥はベルリンで客死）。旧会津藩出身の柴四朗は、洋行前年の1885年10月に刊行された「佳人之奇遇」初編（巻一、二）の著者東海散士である。柴は、イタリア訪問の最後の地トリノで、ハンガリー独立運動の闘士コシュートとの会見を果たす。両者の会見の様子は、帰国後10年を経て1897年9月に刊行される「佳人之奇遇」七編（巻十三、十四）に詳しい<sup>8)</sup>。柴は、西南戦争に出征したことが機縁となり谷の知遇を得て、さらに谷と同郷（土佐藩）の岩崎家（三菱）との関係も生じ、その岩崎家の資金援助により1879年から1884年までアメリカに留学する。帰国の翌年に出された前記「佳人之奇遇」初編（これには谷が序文を寄せている）により、東海散士＝柴四朗の文名は一躍高まった。谷は農商相となるや、柴の語学力とアメリカ仕込みの新知識とを買って大臣秘書官にしたという<sup>9)</sup>。「谷は当時の人気男にして、柴も新たに人気を博し、其の行動は一世の注意する所」<sup>10)</sup>であった。

1886（明治19）年3月13日の横浜出発から翌1887年6月23日の帰国までの1年3ヵ月にわたる一途中のイタリアで約1か月間、病床に伏せりながらも一世界一周の旅は、谷の政治思想にかなり重要な影響を与えたようである。以下、谷の「洋行日記」<sup>11)</sup>の記述に沿って紹介していく。

## 2.2 プリンディジ上陸からナポリへ

4月10日にアデンに到着した谷干城の一行は、スエズ、カイロを経て、25日にマルセイユに上陸、フランスではリヨンやパリなどを視察したのちスイス（ジュネーブ、ベルン）に入り、さらにオーストリア（ウィーン）、ドイツ（ベルリン）、ロシア（ペテルブルク、モスクワ）を歴訪し、再びドイツ（ベルリン、ドレスデン）、オーストリア（ウィーン）を経てトルコ（コンスタンチノーブル）に立ち寄り、さらにギリシア（アテネ、コリントス）を訪れた。

後述するように、谷に遅れて日本を発った黒田清隆らが、イタリアをあとにしてウィーンに着いたのは1887年1月1日であるが、その約2週間後、谷の一行がイタリアを訪れる。すなわち、1月12日の昼、コリントスから乗船した一行は、途中、ケルキラ〈コルフス〉島に一泊したあと、翌14日早朝、イタリア半島南東部のプリンディシ〈プリンデジー〉に到着する。同地は「欧州大陸より兵をトルコ、埃及〔エジプト〕等に出すの要港にして、彼の十字軍の節も此地より兵を渡すと聞く、歴史多き地也」と谷は記す。当時の人口は、1万5,6千人という。その後、汽車に乗車、沿線にオリーブ、ブドウ、イチジクの木々を眺めながら、バーリ〈ハリ〉、フォッジア〈ホジヤ〉を経てナポリ〈ナブル〉に到着したのが夜の10時、ホテル「ロワイヤールデトランジュー」に投宿した。

### ポッツオリ見学

到着の翌15日、案内を雇い、ナポリの西方にある「羅馬時代の蒸風呂」を見学、さらに歴代のローマ皇帝のリゾートであったポッツオリ〈ポツラリ〉の町に向かい、「ネロンの湯」を訪れる。谷は、「ネロンは悪逆なる王にして奢侈を極め、終に害せられたる人なり」と皇帝ネロを説明し、「此の辺、都てネロンの宮殿ありし所にして、〔中略〕此の宮殿より南方に当り、山の突出せる所、古城全然として存す、是れネロンの母〔アグリッピナ〕を殺せし所なりと云ひ伝ふ」と付け加えている。谷らは同地で昼食に牡蠣を食した。谷はその新鮮さと美味を堪能し、2人前を平らげたという。また、55フランを出して、「珊瑚珠の細工及ボンベアの焼石、貝に彫物等」を購入している。

### ポンペイ見学

1月16日朝、汽車でポンペイ〈ボンペー〉を見学を訪れる。18世紀半ばから発掘が始まったポンペイの町は、谷らが訪れた当時には「全町の三分の一計」が発掘されていた。「千七百年前の町、巖然として存し、当時の人民の生活の有様、皆思ひ見るべし、実に世界の奇観也」と谷は感嘆の念を隠さない。ついで、よく知られる同所の性的な遺物品について、谷は次のような評価を寄せていた—「遊女家なるべしと予定せる家には四面尽く笑ひ絵〔春画〕を描けり、又所々に男根を彫刻せる所あり〔中略〕当時の人、驕侈淫乱を極め、更に相怪まざるかと思はるゝなり」。さらに、ウィーンで教えを乞うたスタインの言葉を引きつつ、「温泉の罪」「入湯滅国」の説についてひとくさり講釈を垂れる—「此地、火山の麓にあり、温泉自由にして人世の快樂を極めたる事知るべし、〔中略〕スタイン氏、曾て、入湯滅国の談あり、羅馬、トルコの衰替は、熱き湯に入るを好むより起るを説けり、蓋し入湯は人心を快くすると共に、懶惰を催し、淫情を起すは温泉の罪、許多なるべし、識者の熱湯浴を恐るゝも亦故あるなり」。

17日には水族館・博物館を見学する―「館中奇物多し、ボンベより掘り出せるもの、最も多し、壁画殊に妙なり、〔中略〕彫刻亦多し、油絵は以国〔イタリア〕の名産なれば、良き物多し、古銭亦極めて多し」。

### 2.3 ローマにて

1月18日朝8時、谷の一行はナポリを発ち、午後2時半にローマに到着、駅には田中不二麿公使らが迎えに来ていた。翌19日午後、谷らは日本公使館を訪れ、田中夫妻に面会する。さらに20日の午後には、田中公使同道にてイタリア外務卿を訪問する。通訳には黒川誠一郎書記官があたった<sup>12)</sup>。

イタリア政府へのひとつおりの外交儀礼も済んだ21日、谷らは天野書記生の案内で、「有名な大寺」（サンピエトロ大聖堂）を見物する―「法王の宮殿下に相連り、壮大、実に可驚、世界一の寺也と云ふ事、誣言に非ざるべし」。ついで見学した「シーザーの宮殿」についても、「当時の盛なる、思ひ見るに足る、秦始皇の阿房も優劣如何と疑ふ計なり」と、ともに大いに驚嘆した様子を窺わせている。この日は、ほかに、「角技場」「凱旋門」を見学してもいる。ついで22日には、カタコンベ（カタコンフ）を見学したが、ローマに着いて1週間たった23日は、「諸方に手紙を出だす為、終日出です」、たまった疲れを癒したことと思われる。そして24日からは、再び各所を見学してまわる。

ところが27日になって、寒さと疲れが祟ったのか、谷は、体に変調をきたす。以前に落馬した際の傷がリウマチのように痛み出したため、この日は終日ホテルに引きこもった。それでも、翌28日には、農業博物館を訪れ、「建築の豪大なる、大金を費せる事」に感銘している。そして29日は、「油絵及彫刻の博物館」の見学について、天野の案内により下院の議場に赴いている。当日は「工部省の定額の議事中」であった。

2月1日の出立を間近に控えた30日、谷らは「サンホール寺」を訪れた。―「新築未だ落成に至らず、内飾は大概成就、〔中略〕美尽し、又善尽せり〔中略〕サンホールを斬る所の油絵巧也、ミカエルアンゼロとやら云ふ名工の筆多し、僧は仏国の者計也と云ふ」。ここで谷は、十字架二個とリキュール酒1本を買う。「僧、至て愛相好し」と、そのやりとりが彷彿するようである。さらに、「此辺より出つる土、一種のネン土にして、砲台を築くに最好と云ふ、露国ヲデッサ、セバストポール等に輸出すと云へり」と、軍人らしい関心を示している。そして帰途、「旧郭内のカリバルデーの陣せし小山に登る」。その頂にはガリバルディのために建てられたという十字架が佇んでいた。ガリバルディは、マツィーニ、カヴールと並んで、当時の日本人にもよく知られたイタリア統一の英雄であったから、谷も既にその名を知っていたであろう。

出立を翌日に控えた31日は暇乞いのため公使館へ行ったものの、その夜、谷は高熱を発する。翌日になっても熱は下がらず、落馬の傷が痛んだ。せっかくの田中公使招待による日本食の昼食会にも出席できず、医師を呼んだが来診は2月2日となった。その後、6日頃より次第に快方に赴き、医師も軽易の旨を述べたため、11日に立出と定め、10日、あらためて田中公使と松岡判事方へ暇乞いに訪れた。この日はあいにく「羅馬にて三十年なき大雪」になった。それでも、翌11日午前11時頃の寒いなかを、谷の一行はローマを発ってフィレンツェに向かう。駅には田中公使らが見送りに出向いてくれた。

## 2.4 フィレンツェにて

2月11日晚、フィレンツェに到着して投宿後、谷は食事を終えて火にあたっていたところ、「心持宜しからず、遂に服を改め寝台に就かんとせしに、忽ち呼吸切迫、胸部に物の横たはるが如く、且つ右の胸下より脊中に掛けて曾ての傷所に痛苦を發し、起臥共に困難なり」という深刻な事態に陥った。すぐさま医師が招かれた。その後、谷は、一時は異国の地での死を覚悟する—「病勢次第に上り、廿二、三日より〔三月〕五、六日の頃に至り、自ら思ふ、死生の界、正に此にあるべしと、幾度か首をモタゲ、万一の時の遺言を認めんと思へ共、不能」。

医師は朝夕診察に訪れてくれたので、「其の功なるか、廿七日の朝より熱度は矢張り三十八、九度を昇降すれ共、痛み頓に去り、殆ど大なる荷を卸したるが如し、心持甚だ宜し」。こうして「次第に快方に赴き、痛も去り、胸のツカへも去り、食事も勤み、最早生命に恐れなきに至りしは三月三、四日の頃なりき」。なんとか谷は死の淵から戻ることができた。12日には、医師の許可を得て、はじめて馬車で近傍の公園におもむき、2時間ほど散歩することもできるようになった。

3月19日には、医師から散歩の許可がおりたため、久しぶりに湯にて全身を拭い体の汚れを落とすことも可能になった。そして食後2時頃より馬車にて「ミケアジロウと云有名な画家、詩家、建築家の築きたる城堡」を訪れる—「此処、現今は寺あり、寺の下、眺望頗る佳にして、フロランスの市街、皆眼下に在り」。到着後1か月余がたって、ようやくフィレンツェの町を眺望することが叶った。谷はその感動を次のように記している—「余、此地にて病に臥する事、已に四十一日、今日始めて市街の全形を窺ひ得たり、散歩二時間計にして帰る、体力大に益すを覚ゆ」。翌20日も「心持、甚だ宜し」かった。この日、ローマの田中不二磨公使より次の来信があった<sup>13)</sup>。

昨今貴恙得、如逐日御軽快、春和ト共ニ御恢復之事と信し候、貴府〔フィレンツェ〕ハ養病至適之地、御愛護為国千万所祈ニ候、過日来ハ、小松宮殿下之御来貴ニ際し匆忙陪常〔席カ〕御疏曠、素懷ニ負キ申候、まづは御近況相伺度、小啓

三月十九日 田中不二磨

谷閣下

本月四日之貴信ハ前日正ニ接展ヲいたし候、為念追伸、スヘシヤ要砦御回覧之儀ハ御所恙ニ依り、此際御廃止ニ相成候旨、過日当国政府え通知致置候、不日御全快之上、倘御回覧之意も候ハ、其節は再ヒ照会ニ可及ト奉存候、此項拝陳候也

不二磨副啓

谷閣下

谷は、翌20日付で次の返書を認めた。

益御壯健御奉務、日出度奉存候、先般ハ久敷御地〔ローマ〕ニ滞在、諸般御世話被下、万事都合宜敷忝奉存候、爾来宮〔小松宮彰仁〕殿下ニも御来着、御多忙之程御察申候、随て野天御地発足、当地〔フィレンツェ〕着之夜より、意外之大患ニ罹り、困難之際、毎々御懇談御訪問偏に忝奉存候、天命未タ絶セス、幸ニ漸々ニ快方ニ赴キ、現今ニ至りてハ、近

傍散歩いたし候位に相成、今一週間も致候ハズ、必ス出足も出来可申と相楽罷在候、右様御省念可被下候、過般は日本醤油を御相談申上候処、多分に御投患被下、三食必ス少々ツ、相用ヒ、金液玉露之思意〔カ〕為シ、今日猶一瓶ヲ剩シ、弥々珍重罷在候、彼是御礼も可申筈之処、余疲未タ全ク除カス、執筆難渋之為、甚御無音申上候、先ハ御礼旁如此御座候、早々頓首

三月廿日 干城拝

田中全権公使殿侍史

尚々、御内室様へ宜敷御伝声相願申候、将タ、昨日之御手紙忝拜読仕候、シベシヤ一覽之儀は無論廃止いたし候間、右様御承知被下度候

21日に日本の新聞が届く。この日は終日外出しないで過ごしたというから、久しぶりの日本からの新聞を隅から隅まで読んだことであろう。翌22日、医師は、26、7日には出足してもよい旨を伝えた。谷の健康は、着実に回復していったようである。23日午後には市中を散歩し、「体力強を覚ゆ」るまでになった。25日、いよいよ出発を翌日にひかえ、少々忙しかった。午後3時頃より市街を歩いて色々と土産品を買い求めた。「モザイクの箱六品、指輪二つ、エリ留め一つ、ボタン二つ、時計一つ、凡そ七百フラン計なり、大散財なり」と記している。夜には、出立と快気祝いを兼ねてシャンパンを傾け、3人で会食する。そして、26日朝8時発の汽車にてフィレンツェを出発、9時30分、ピサ〈ヒサー〉に到着した。

## 2.5 ピサからラ・スペツィアへ

ピサに到着した谷らは、その足で「有名なる斜塔」を見物した。「体力大に増を覚ゆ」と、健康はほぼ復調した様子である。ピサでは「日本の黒竹及根鞭の杖」が多く目についた。しかし、「一本一フランに満たず、如此遠方に来り、纔に一フランに足らず、是れ日本商人の競争より遂に下落、如此に至る、可歎なり」と、農商務大臣らしい感想を記している。ピサには1泊のみで、翌27日には、9時40分の汽車で出発、11時半頃、ラ・スペツィア〈スベシヤ〉に到着、同地では「クランホテルヨウロツハ」に投宿した。イタリア北部の軍港・造船所として知られるラ・スペツィアは、先の田中不二麿発／宛書簡から窺えるように、当初は谷が見学を望んでいたものの病気により取り止めざるをえなくなった施設である。同所について、谷は次のように記している。

当所は以国第一の軍港にして、盛大なる造船場あり、地形、三面皆山にして、南一面海に臨み、景色亦佳なり〔中略〕余、前に当港を見物せん事を政府に請ひ、許諾しありしが、病気のため中止したり、故に只車に沿岸の形勢と砲台の位置を遠望するのみなり、薄か残念なり、然れ共、大勢は分りたれば、益を得る不少〔中略〕有名の大軍艦以太利号は造船場に入り、修繕中の由なり。

## 2.6 トリノにて

3月28日午前11時過ぎ、谷らはラ・スペツィアを後にする。ジェノヴァ〈ゼノア〉に到る海

岸沿いの鉄道の過半はトンネルであった。ついで、ジェノヴァからアペニン山脈の北端を北へ超えてパダノ＝ヴェネタ平野に出る—「アレキサンドリヤア駅に至り、全く平地に出つ、是れより車を替ふ、此の辺、桑を植ゆる多し、牧場多し、桑能く生長せり」。一行がトリノ〈チュラン〉に着いたのは午後7時頃のことであった。

翌29日、早速に市内を散歩する。「殆ど小巴里なり、以国第一の清潔なる町と云ふ」と、谷はトリノを気に入ったようである。馬車で市街の周囲を見物する—「有名なる人物の銅像、石像多し、又以国一統の記念塔建築中なり、壮大なり」。またトリノについて、「金剛石其他の宝石まがひを造る事、世界に有名なり、殆ど其偽を弁ずる不能と云ふ」と説明している。そのためか、ホテルへの帰途、「指環及女の飾物、ゑり止め、合せて九個」を求めた。320フランほどであったという。

30日には「武器庫」を見学したが、「格別多からず、又奇物なし」と落胆の様子を窺わせるが、「日本の武器亦多く蔵す」との点に驚いたようである。それより、「山上に通ずる一種の鉄道」に乗り、「西北アルプスの諸山を遙に望み、チュランの市街を眼下に見る」ことができた—「山下を廻り、西より東に亘り、尽く良田にして人民皆富裕と見ゆ、養蚕盛なる地なれば、桑能く生長す」。トリノ滞在はわずか3泊と慌ただしく、この日は翌日の出発の準備で荷物を片付けるなどして、11時30分頃には床に就いた。翌31日朝、谷らは再びパリに向けて出発する。

## 2.7 柴四朗とコシュートとの談話

ところで、トリノを発つ前日の30日、柴四朗は谷らに同行することなく、ハンガリーの独立運動家コシュート＝ラヨシュ〈コウシ〉(1802年～1894年)を訪れていた。谷はコシュートについて、「此人、四十年匈牙利の独立を計り、兵を挙げたる時の巨魁にして、有名なる人なり、今年八十四、猶壯健なりと云ふ、著述もあり、子息二人皆以国に仕ふと云ふ」と説明している。また、柴によれば、「終身堯帝の臣たらざるを誓ひ、幽棲を此〔トリノ〕に卜して琴書自ら楽み、超然世と離る」と記す<sup>10)</sup>。この「匈国老偉人骨数斗〔コシュート〕」に対して柴は一書を裁し、使者を送って面会を依頼した—「曰く、東方の年少、老偉人の英名を聞くや久し、〔中略〕国に帰りて後、毛穎をして公の志を東方に伝へしむ、若し重ねて鳳眉を拝し高論に接するを得ば、素望達矣」と。これに対して、コシュートは「明朝、客の来を待たんと」の応諾の回答を寄せた。

いよいよ面会が成就して、柴はコシュートに向けて当時の日本が置かれていた状況を説明する。

今や弊邦、欧米と条約改正に苦慮し、上下病むが如し、其争ふ所は法権の独立に在り、内地の開放に在り、土地の所有権に在り、海関の増税に在り、僕等の主張する所は、有司〔にとつて〕の過激、行ひ難しとする所、有司の譲与せんとする所は、僕等〔にとつて〕の国権を毀傷し、国利民福を殺ぎ、殆ど亡国の兆ある者となす所、而して有司は毎に上下を脅かして曰く、若し我要求多きに過ぐれば交戦の危難を避く可からずと、僕等の感慨此に存す(577頁)

これに対してコシュートは、「欧洲に三大禍の陰伏するあり、其破裂、早晚避く可からず」と

して、「軍備過大の禍」、「合従乖離の禍」、「貧富懸隔の禍」の3点を挙げる。そして、「軍備過大の禍」と「貧富懸隔の禍」については、それぞれ次のように述べている。

夫れ、歐洲各国の互に競うて軍備を拡張するや、殆ど其極を知る可からず、〔中略〕其兵と資とを給するの人民、果して能く永く其負担に堪ふべきか、人民の産、限あり、軍国の費、限なし、焉ぞ能く困弊労働、胥ひ傾覆せざるを得んや、夫、伊太利の如き、既に已に掲焉其徴を見るべきものあり、何れの邦国か能く然らざるを得んや、是れ所謂軍備過大の禍に非ずして何ぞ、嗚呼殺人滅国の資を移し、六百万の壮丁と十三億の巨資とを併せ、之を利用厚生の途に用ず、鰥寡孤独告ぐる無き可憐の人を救ふの資に供せば、則、其人生の幸福快樂を増進する、其れ果して幾干ぞ、豈長嘆せざるを得んや（584～585頁）

凡そ惨の又惨なるものは、貧富懸隔の潰裂より来る禍に在らん、近時、發明技術の増進するや、富者は益々富み、貧者は益々貧に、貧富の差、貴賤の別、日に以て漸く遠く、〔中略〕是に於てか天賦貧富平均説、社会党論勢力を得ん、〔中略〕但、僅に一縷の望を繋ぐべきものは、学者仁人、能く国家社会主義を以て貧富の間を調和し、之を国家社会の事業に応用するの如何に在るのみと（585頁）

このように、コシュートは、来るべき世紀転換期における列強間の軍事的な対立の激化、国内での社会対立の昂進に向けて柴に注意を促している。コシュートの言う「国家社会主義」とは、社会政策的な施策を指すものであろうか。しかし、コシュートは、それ以上に具体的な処方箋を柴に与えたわけではない。

### 3. 内閣顧問黒田清隆のイタリア

#### 3.1 黒田清隆とその洋行の背景

大久保利通が1878（明治11）年に暗殺された後、参議兼開拓長官の黒田清隆（1840/天保11年～1900/明治33年）は、薩摩閥の中心に立ったものの、明治14年政変（1881年10月）の一因ともなった開拓使官有物払下げ問題により大きく傷つき、薩摩閥のなかでも孤立ぎみとなった。その政変から3ヵ月後の1882年1月11日、黒田は参議兼開拓長官を免ぜられた（陸軍中將はそのまま）。伊藤博文らのはからいで、新たに内閣顧問に任ぜられたとはいえ、これは一種の閑職であった。その後、1885（明治17）年には、伊藤により、黒田を岩倉倉吉あとの右大臣に就任させようとの動きもあったが実現しなかった。「何分平日不品行ニテ天下ノ誹謗多ク〔中略〕就中黒田酒癖有之バ、天下皆忌嫌ヒ候人なれば、今日、右大臣ニハ不可然」との意見に示されるように、黒田への不評は根強く、天皇もそれを案じた<sup>15)</sup>。

ついで同年12月、内閣制度に移行する際にも「黒田首班」の話が出たものの、その酒癖が取り沙汰され、実現には至らず、22日、伊藤博文内閣の成立となる。黒田自身、「例之酒癖、所詮医師治療すべき治術万々六ヶ敷」と告白していた。伊藤内閣組閣に先だつ12日、黒田は「比年持病の為、応分の職務を相尽候義も相成かね」<sup>16)</sup>との理由で、内閣顧問・陸軍中將の辞表を出

したが、許されなかった。三宅雪嶺が記すように、「実に黒田は磊々落落、古豪傑の風あると共に、鄭重懇懇、当世紳士たるを失はず〔中略〕兎も角も凡人ならず、愉快なりとて、一般に伊藤よりも気受けよし」<sup>17)</sup>との面も持ち合わせていた。その伊藤が、「黒田の立場に同情し、洋行して息を抜くが得策なりとて、西郷〔従道〕、大山〔巖〕、松方〔正義〕等に謀り、黒田に之を勧め、榎本〔武揚〕、西（徳二郎）等が、西伯利〔シベリア〕旅行の新たに得る所あるべきを語れり」という<sup>18)</sup>。こうして、黒田は病氣保養を理由に世界漫遊の旅に出発する―「鳥尾に次いで谷農相が洋行せるは、相応に世の注意を惹けるに、六月二十三日、黒田清隆が西伯亜を経て欧米漫遊の途に上ること、衝撃を与ふるや少なからず」<sup>19)</sup>という。

谷の出発に遅れること3か月、1886年6月23日、黒田清隆の一行は横浜を出発、途中、長崎によるなどして、7月7日、ウラジオストックに上陸した。それからシベリアを西へ進み、モスクワ（9月28日）、ペテルブルク（同月30日）を経て、10月28日にコンスタンチノーブルに到着、ついで11月19日にはアテネに到る。随行員は、下記のとおりである。

小牧昌業（鹿児島／文部大臣秘書官）、鈴木大亮（仙台／北海道庁理事官）、伊集院兼雄（鹿児島／陸軍工兵大尉）、市川文吉（江戸／非職、外務省御用掛）、前田清照（鹿児島／郵船会社支配人）、寺田弘（鹿児島県士族）

黒田の旅行は、当初は私的な漫遊であったが、イタリアにおいて公用旅行の名義に切り替えられる（その間の事情については、下記の12月6日の日記記事を参照）。黒田は、1887年4月21日に帰国、11月には「環游日記」全3冊<sup>20)</sup>を上梓する。これは、黒田の口述を小牧昌業（1843年～1922年）が文章化したものであるという<sup>21)</sup>。小牧は、若くして漢学・漢詩に加え英語を学び、のちに大正天皇に漢学を進講した人物であったから、記録者として適任であったと言えよう。以下、「環游日記」の記述に沿って、黒田のイタリア〈観光〉を追っていく。

### 3.2 イタリア統一の歴史について

黒田「環游日記」は、イタリアについての記述の冒頭で、ナポレオン時代以来の、とくにサヴォイア家によるイタリア統一の歴史を次のように描く―「伊太利王国の今の疆域を一統せしは、千八百六十年以来の事にして、其以前は羅馬国の亡びしより数多の邦域をなし、ナブル国、サルヂニヤ国、ロンバルデー国、ウェネチー国等、又其中部には羅馬法王の領国等分立し、離合常ならず」。このように、日本の国家統一との同時代性が語られる。また、この国家統一過程でのフランス、オーストリア、プロシアとの外交および戦争、そしてそのための軍事費と財政負担との関係など、日本と同様の困難性に注意が向けられていた。さらに、イタリア統一過程における英主ヴィットリーオ・エマヌエーレ2世とカプール、ガリバルディらの功臣たちについては、次のように語られるが、ここには明治天皇と黒田ら維新の元勳とのアナロジーが看取される。

千八百七十八年、伊王崩ず、在位二十九年、寿五十六歳、王、人と為り英敏豪邁、智謀才略、衆に抜く、人を知りて善く任じ、將に將たるの才略あり、故を以て、宰相にカプールあり、

將軍にカリバルデーあり、皆超凡の才にして、能く王の頤指を受く、〔中略〕仏帝三世那勃烈翁〔ナポレオン〕の後、欧州各国に在りて英主と称する者は此王を推す、又民を愛し、衆を濟ふ、其崩ずるに及び、遺骸を寢殿に安じ、衆庶を縦して来弔せしむる三日、国民老幼となく来集して哀を挙ぐる、日に万を以て計ふ

### 3.3 プリンディシ着、そしてローマへ

11月26日朝、アデンを發した黒田らはピーレ港に着き、ここでプリンディシ行の汽船「プリンシーブ、ヲドノ」号に搭乗する。2日後の28日朝8時、左手にイタリアが見えてくる—「人家稠密、船舶繫泊の地を見る、即「プリンジシ」港なり」。12時に上陸、しばらく休憩のためホテルに入る。その折、偶然にも黒田らは鳥尾小弥太、隨行の陸軍少佐太田徳三郎に遭遇する<sup>22)</sup>。鳥尾らはヨーロッパ各国の歴遊を終え、エジプト経由で帰国するところであった。3時間ほどの談話の後、鳥尾らと別れた黒田らは、午後4時半頃、ローマに向けて出発した。沿線の光景について、「極目平坦、田間橄欖樹〔オリーブ〕、桑樹を見る、地は赤砂土を混じ、地質甚だ耕作に適す」と記される。午後7時15分、パリー（パリ）駅に着いて小休止、午後10時30分フォッジア（フージア）駅に到り、汽車を乗り換え、11時10分に同地を發する。

さて、黒田らは29日午前6時過ぎ、ナポリ北方のカゼルタ（カサータ）に着した。同地には18世紀に建てられた王宮があった。黒田らは、汽車を下りて市街を散歩した—「〔ナブル〕王の古離宮の庭園を見る、結構頗る雅致を極む」。谷らのようにナポリには向かうことなく、9時18分に同地を出發した黒田らはローマに向かう—「峰巒道の左右に起伏し、山麓には概ね村落あり、其間平坦の地は甚だ耕作を力めたり」という沿線の光景は、「羅馬に近くに及び、田野曠濶」となっていた。午後2時20分、一行はローマに着し、「ホテル、デ、パリー」に投宿した。午後4時15分、黒田らは直ちに日本公使館を訪問し、田中公使と会う。そして、その晩には、田中公使、黒川書記官、天野・市来両交際官試補、貴島海軍大尉らが来訪したという。

### 3.4 ローマにて

到着の翌30日朝10時、黒田は日本公使館を訪問、ついで午後2時には田中公使とともにギリシア公使館を訪問するが、公使不在であったため、翌日の午後に再び田中と訪れて公使と会見する。ついで12月2日には、やはり田中とともにイタリア外務卿を訪問、3日には外務書記官が、外務卿の答礼のために来訪する。そして、6日の条で黒田は次のように記す—「今般の旅は、病氣保養の為、賜暇漫遊なるが、到る処、各国帝王謁見及調査の事件ありて、其国の官衙に依頼する等、私行にては不都合の事少からざるを以て、公用旅行の名義を得たき旨、伊藤総理大臣へ電報せしに、此日、其請求を許すとの回報あり」。10日午後、田中公使が、12日にイタリア皇帝への謁見が叶った旨を通報してきた。それに対して黒田は田中へ返簡するとともに、11日には、ロンドンへ電報を送り、小牧昌業・鈴木大亮・寺田弘にローマへ来るよう指示した。

12日午後、黒田は、伊集院兼雄・市川文吉とともに皇宮に赴き、イタリア皇帝ウンベルト1世（1844年～1900年 / 在位1878年～1900年暗殺）に謁見した。皇帝は、訪日したイタリア人が、日本政府から厚遇を受ける者が多いとして、謝意を述べた。ついで皇帝は次のように述べ

ている。「貴国百般の事情を詳悉伝聞し、其進化の急なるには驚嘆に堪へざりし、因て余は貴国に遊歴の想を引起したりき〔中略〕昨年〔一昨年の誤り〕大山陸軍卿一行、当地に来たられ、其節、貴国の軍備百般の景況を聞いて感服せり、又随行員も万事心得能く西洋の兵式に通じ、何も彼も詳悉致されたり〔中略〕後年に至れば、却て欧州人が日本を模範と為すも亦知るべからず」。

15日、小牧昌業・鈴木大亮・寺田弘がロンドンよりローマに到着、黒田らは16・17の両日は、議院を見学を訪れた。「議場の体裁、英国に比すれば、稍静肅なり」。また17日夜には、田中公使を訪問、イタリアの財政の概要を質問のため、大蔵省への紹介を依頼している。19日付で伊藤博文宛に認められた黒田の次の書簡が、その理由を明らかにしている<sup>23)</sup>。

〔前略〕伊国の諸王国を合併して、一統の治をなせしは二十六年前にして、今日に於ては歐洲五大強国に肩随するの勢となれり。全国の人口凡二千七百万にして、常備兵員は二十五万なり。〔中略〕外は接壤の仏奥両大国と怨を結び、内は諸王国の残党及教徒の怨あり、軍備を盛にし、威力を張るは已むを得ざるの勢に有之、〔中略〕先年以来、鉄道を造り、各処に台場を築き、軍艦を購造する等、国帑の支出は夥しきものに有之、現今、国債の総額凡百十億フランクに及居候。十三四年前、大隈参議の話に、我国財政困難は未だ伊太利程に甚しからず、他の歐洲諸大国には及ふ能はざれども、伊国には猶及ぶべし云々、記憶致居候処、〔中略〕今日に在ては困難の形況相見不申、因て其財政を支持するの顛末、篤と取調申度、現今着手致置候間、猶明細は他日可申述候。

12月17日の条で、黒田「環游日記」はイタリアの議院と政党、教育について以下のような諸点を記している。なお、25日の条では、陸海軍の制度についても記している。

### 議院と政党について

- ①議院の組織は元老院・代議院から構成される。法令はこの両院を経て、国王の裁可するものでなければ国法とすることができない。
- ②元老院の議官は国王が選任して、定員はない。また、国王は臨機に議官を改選する無限の権力を有するが、その権限に訴えるのは、実際上の弊害が生じない程度においてである。
- ③代議院の定員は508人、年齢は満30歳以上、任期は5年で、国民が直接に選挙する。すなわち、国王は元老院議官を任命し、国民は代議士を選挙するのである。また、以前は1区1人の選挙法を採用していたが、非常に弊害があったため、これを改め、数区を合併して、毎区若干名を選挙する制度に変えた。これにより、少数といえども議院に代表者を有することができるようになった。
- ④政党は、大別して、保守・改進黨の二党で、名義上では明確に区別できるが、実際は英国のように分界が判然しているわけではない。ただ、伊太利の統一政治を鞏固にする方法・手段の点で異なる所があるに過ぎない。伊国の政党は、主義よりはむしろ人物の争いである。現今は右党・左党・中立党の三政党である。

## 教育について

- ①教育は、初等・中等・高等の三種に分けられている。
- ②初等教育は義務教育であり、国民の子弟はいずれも読み書き・算術を学ばなくてはならない。教育費用は一切地方費によって支弁し、生徒には授業料を課さない。また、貧困のために書籍・筆紙等を買うことができない子弟には校費により支給している。
- ③中等教育の学校にはテクニクとクラシクとの2種類があり、いずれも官設であり、教育費用は国庫より支弁している。
- ④大学は、科業を4または6級に分けて教授している。
- ⑤中学校の授業料は、1カ年に10フランないし80フラン、大学の授業料は1カ年に約150フランであるが、貧困の者には授業料を軽減ないしは免ずることもある。
- ⑥算術・農学・商法・音楽・兵学等の特種の学校があり、概ね官設である。

## 財政について

12月18日夜には、田中公使が来訪、財政上の諮問のことについて外務卿を通じて大蔵卿へ通牒済みと連絡してきた。そのため20日午前に、鈴木大亮を大蔵省へ派遣している。同夜には、小牧昌業・鈴木大亮・寺田弘が、田中公使から招宴を受けている。23日、鈴木大亮を再び大蔵省へ派遣し、「紙幣の沿革を記たる書類を得て帰」ってきた。

次第に年の瀬も近づき、寒さもつのってきた。23日の条で黒田は次のように記している。

頃日、当地の気候、摂氏十度以上にして、北方諸国に比すれば、復に温暖なり、然ども家屋の構造、意を防寒に用ひざるを以て、室内に在ては却て寒気の北方に勝るが如きを覚えたり。

24日、ギリシア公使・書記官を晚餐のためホテルに招待、田中公使、松岡判事、黒川誠一郎参事官、石本新六工兵大尉、貴島海軍大尉、市来・天野両交際官試補等も同席した。

田中公使は26日にも来訪、ともに公園を散策するなど、黒田と頻繁に接触していた様子が窺える。28日、大蔵省から書類が到着し、早速、黒川参事官と鈴木大亮が翻訳にかかった。同日条には、「伊国財政の沿革」が詳述されているが、煩雑にわたるので、ここではポイントとなる次の点のみ紹介しておく。

埃国戦争の了りたる以来、政府は苛重なる税法を設け、歳入の増加を謀れり〔中略〕此歳入の増加は、ウェネチー、ローマの二州を併せ、王国の版図を広め、且つ全国既定の税額に対し、其割合を重くし及新税を設けたる等に因れり

- 一 新に粉磨税を設く
- 一 動産所得税を増す〔中略〕
- 一 資本税を増し〔中略〕
- 一 煙草税を増し且政府の専売法を拓め〔中略〕
- 一 職業税を増し〔中略〕

此諸種の増税は、当時其苛重なるを非難する者なきに非ず、然ども實際之を徴収するに当ては敢て甚しき困難なきのみならず、新王国の諸制度を整理し、国権を拡張するに緊要なる莫大の費額を支弁し、且歳出入の平均を恢復したるは、実に此方法の効用に因れり

以上見たように黒田の記事は、谷とは違ってさまざまな調査関係の記録が多いが、それでも27日の条にはローマの古蹟についての記事が載せられている—「羅馬，古蹟甚だ多し，其尤なる者を挙げれば，サンピール〔サンピエトロ〕，サンポール〔サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ？〕両寺，該撒〔シーザー〕帝の宮殿，集議院の遺跡，格獸観〔コロッセオ〕，浴室の残壁，サンアングロ〔サンタンジェロ〕古城等なり」。そして、それぞれの古蹟について、簡単な説明が試みられている。

### 3.5 ヴェネチアにて

12月29日昼，黒田は市川文吉とともに汽車にてヴェネチアに向かった。小牧・鈴木・前田はスイス・パリを経て，伊集院・寺田はドイツを経て，ともにロンドンで再会の予定とされる。30日払暁，ヴェネチアに到着した。その後，同地の日本領事館の長沼守敬・伊藤平三らが宿所に来訪してくれた。黒田は，初めて見るヴェネチアの様子を次のように紹介する—「旅館を出て舟に上に，古の議事堂〔ドゥカレ宮殿？〕に到る，其結構，甚だ宏麗なり，合衆政治の時の議事堂にして，千八百年頃，仏帝那勃烈翁〔ナポレオン〕に破られしまで之を用ひたり，又其傍なるサンマルク寺に到る，偉大の建築なり」

ヴェネチアには1泊だけの滞在で，翌31日午後3時には，ヴェネチアを出発して，一行はウィーンに向かった（1887年1月1日，ウィーン着）。その後，黒田はロンドンから田中不二麿に次のような礼状を送っている。

拜啓 維納〔ウィーン〕ニ於テ年首之御名刺拜受，難有御礼申上候。爾後，伯林〔ベルリン〕・巴里〔パリ〕ヲ経テ，過日〔二月七日〕当地〔ロンドン〕到着候。外交政略上ニハ御高見詳悉承知仕候。独乙〔ドイツ〕ニ於テハ来二十一日新議員撰挙致候趣ニ候。御地ニテモ議院解散，内閣更迭相成候模様ニ有之候段伝聞致候。其後之形況ハ如何ニ候哉，乍御手数一言電動〔ロンドン〕又ハ新約克〔ニューヨーク〕ニ宛御一封被下度，偏ニ奉懇願候。敬具

二月十六日 黒田清隆<sup>㊤</sup>

田中全権公使殿

### おわりに

ほぼ同じ時期，同じく世界を回って帰国した谷干城と黒田清隆の二人であるが，両者の帰国後の政治的軌跡は対照的であったと言える。谷は，政府批判の意見書を出して7月に農商務大臣を辞し，おりからの民権運動の復活＝大同団結運動と三大事件建白運動に大きな影響を与える。

谷が帰国した時期，日本国内は井上馨外相の改正条約案をめぐる大きく揺れていた。帰国後まもない7月3日，谷は井上案に反対する意見書を伊藤首相に提出，26日に辞職する。とはいえ，谷は「伊藤に楯突きたるが，其後とても洋行を以て深く伊藤を徳とし，戯れながらも合掌し「伊藤大明神」と称せり」<sup>24)</sup>という。坂野潤治氏によれば，谷の意見書は，「単に井上馨外相の対英軟弱外交を日本主義者として非難しただけのものではなく，行政改革の必要を説き，

農民のための減税を唱え、国会開設以前に言論・集会の制限を撤廃せよと論じたもので、自由民権論そのものだった<sup>25)</sup>。黒田清隆宛書簡のなかで、伊藤は、「同人〔谷〕、過日夏島〔伊藤の別荘所在地〕へ訪問の節も、自称して民権論者と相成たりとの事に有之候処、此意見書にても充分相露候様被察申候<sup>26)</sup>と述べていた。とは言え、谷と同郷で天皇側近の佐々木高行によれば、谷は「民権論にあらずして、むしろ王道論にあり、其の説、一に国体に立脚するものなり<sup>27)</sup>」ということであった。8月1日には、民権運動家たちによる谷支持の示威運動がおこされる。他方、柴四朗も秘書官を辞し、しばらく興津に隠棲したが、「後藤象二郎と手を組み、反政府諸派を結成して一大政党を作り出すため大同団結運動に参加、同志を糾合するために全国を奔走した」。その後、1889年3月、後藤が黒田清隆内閣の通信大臣として入閣するや、柴は谷を中心とした政党組織を計画したが、これは実現しなかった<sup>28)</sup>。

他方、黒田は9月には谷辞職後、一時土方久元が就いていた農商務大臣のポストに座る。10ヵ月におよぶ黒田の世界一周の旅行は、ある意味では、黒田が政治的な再起を賭けた旅行であったのかもしれない。帰国より1年後の1888（明治21）年4月30日、黒田は第2代総理大臣として内閣を組織する（～1889年10月24日）。長州閥を代表する伊藤に代わって、薩摩閥代表者を首班とする初の内閣である。そして、翌年2月11日、黒田は、宮中正殿において挙行された大日本帝国憲法発布式典において、明治天皇より憲法を授けられるという「榮譽」をになうことになる。

谷と黒田とが、その世界〈観光〉の旅から得たものは、二人のイタリア〈観光〉のなかにも表れているように思われる。帰国後の谷と柴との政治行動の共通性から類推して、両者の政治思想を近似的なものと考えることが許されるならば、「軍備過大の禍」という点で、「伊太利の如き既に掲焉〔はっきりと〕其徴を見るべきものあり」と言うハンガリー独立運動の闘士コシュートの言葉は、柴を通じて谷にも感化を及ぼしたのかもしれない。帝国議会開設後、貴族院議員に任ぜられた谷は、「終始一貫した政費節減論、さらに民力休養論、反増税反軍拡論」を唱えていく<sup>29)</sup>。これに対して、黒田にとってのイタリアは、国家統一の時期も日本と大差なく、それに伴う軍事的支出により莫大な財政赤字を抱えていた。そのイタリアー1880年頃に参議時代の最大隈が「我国財政困難は未だ伊太利程に甚しからず、他の歐洲諸大国には及ぶ能はざれども、伊国には猶及ぶべし」と語っていたイタリアーが、それを克服しえた理由、「其財政を支持するの顛末、篤と取調申度」と述べていたように、軍備拡大を支えうる行財政策に強い関心を抱いていたように思われる。

本報告で扱った谷と黒田に加えて、この時期にイタリアを訪れた他の政治家・軍人たちの〈観光〉をも具体的に見ていくことで、さらに明らかになることも多いと思われる。たとえば、谷・黒田に先だって欧州の軍事視察を行った大山巖らの一行は、1884年3月末から5月初めにかけてイタリアを訪れるが、彼らは「海軍港、製造所及び海岸砲台等」、あるいは「モデナの兵学校」などを視察している<sup>30)</sup>。谷もスペイン軍港の見学を試みていたように、明治中期において、イタリアは軍事的な視察対象としても重要な国であったと言える。

## 注

1) 秦郁彦編「日本陸海軍総合事典」（東京大学出版会、1991年）参照。他にも、皇族からは伏見宮貞愛

- 親王（1885年8月～1886年8月）・小松宮彰仁親王（1886年8月～1887年12月）など、概して陸海軍人の視察が顕著である。
- 2) 田中の伝記として、西尾豊作「子爵田中不二磨伝 尾藩勤王史」（大空社、1987年、原書は1934年刊）がある。
  - 3) 鈴木栄樹『福沢諭吉と田中不二磨』（「福澤手帖」82号、1994年9月）参照。
  - 4) 百年史編集室『「西園寺公望書簡帳」寄贈に対する感謝状贈呈式』（「立命館百年史紀要」第13号、2005年）参照。
  - 5) 鈴木栄樹『福沢諭吉と田中不二磨再論』（1）～（4）（「福澤手帖」125号・126号・128号・129号、2005年6月・9月、2006年3月・6月）、鈴木栄樹・吉川美佐『福沢諭吉と明治初年の偽版取締り問題—明治五年の大木喬任文部卿宛福澤書簡紹介をとおして—』（同前、130号、2006年9月）を参照。なお、本稿との関係では、鈴木栄樹・谷川穰・宮坂朋幸・吉川美佐『田中不二磨をめぐる人々—田中不二磨書簡を通して—』（湯川嘉津美（研究代表者）「近代初頭日本における教育の地方分権化・自由化政策の形成—国際的契機に着目して—」2007年3月）中の西郷従道・鳥尾小弥太・谷干城書簡の解題（吉川美佐執筆）から教示を得た部分も多い。
  - 6) 谷の伝記には、平尾道雄「子爵谷干城伝」（富山房、1935年）がある。また、林英夫監修、広瀬順晴・小林和幸編集「立教大学図書館所蔵 谷干城関係文書」（北泉社、1995年）所収の『谷干城関係年譜（稿）』も参照。
  - 7) 三宅雪嶺「同時代史」第2巻（岩波書店、1950年）284頁以下。
  - 8) 大沼敏男・中丸宣明校注「新日本古典文学大系 明治編17 政治小説集二」（岩波書店、2006年）参照。
  - 9) 大沼敏男『東海散士柴四朗略伝一人と思想』（大沼・中丸校注前掲書）675頁。
  - 10) 三宅前掲書、285頁。
  - 11) 日本史籍協会編「谷干城遺稿」二（東京大学出版会、1976年、原書は1912年刊）所収。また、谷らの視察の報告書は、谷・柴らの辞職後の1888年2月、視察に同行した樋田魯一（農商務省参事官）・道家斉（農商務属）らの手により農商務省から「欧米巡回取調書」として公刊されている。内容は、1 総覧、2 法朗西国之部上、3 法朗西国之部下、4 独乙国之部、5 白耳義国之部、6 瑞奥匈蘭陸伊英北米合衆国之部、7 独蘭那漁業之部、となっており、イタリアについては、「伊太利国蚕卵製造家ノ概況」などの養蚕関係4件ほか、「伊国未欄府貯金銀行組織法」「伊国土地抵当銀行条例」「伊国専門実地農業学校」「伊国農工商務省職制」の取調書が収録されている。同取調書は、「明治欧米見聞録集成」第8-14巻（ゆまに書房、1987年）および「明治後期産業発達史資料」第237-245巻（龍溪書舎、1995年）で復刻されている。
  - 12) 黒川は、明治20年10月に、一時、イタリア臨時代理公使となるが、1884年、田中がイタリア特命全権大使に任じられた頃から下僚として通訳（フランス語）を担当していたようである。黒川の父親はシーボルトに学んだ加賀藩医の黒川良安で、佐久間象山に蘭語を教授したことで知られる。誠一郎は、明治初年に加賀藩の留学生としてパリで法律を学び、フランス語に精通していた（今井一良『フランスの日本語学者ロニーと黒川誠一郎』「石川郷土史学会会誌」第12号、1968年、参照）。
  - 13) 「谷干城関係文書」（北泉社）リール5-195-1。
  - 14) 大沼敏男・中丸宣明校注前掲書、577頁。以下、「佳人之奇遇」巻十三、十四からの引用は、同書により、本文中に頁数のみ記す。
  - 15) 春畝公追頌会編「伊藤博文伝」中巻（統正社、1940年）455頁。なお、黒田については、井黒弥太郎「黒田清隆」（吉川弘文館、1977年）も参照。
  - 16) 伊藤博文関係文書研究会編「伊藤博文関係文書」4（塙書房、1976年）387頁。
  - 17) 三宅前掲書、255頁。
  - 18) 三宅前掲書、286頁。
  - 19) 三宅前掲書、285頁。

駐伊公使時代の田中不二麿と訪伊日本人たち（鈴木）

- 20) 黒田清隆「環遊日記」（1887年）。朝倉治彦監修「明治欧米見聞録集成」第5～7巻（ゆまに書房、1987年）として復刻。
- 21) 井黒弥太郎「黒田清隆」（吉川弘文館、1977年）214頁。
- 22) 鳥尾小弥太（得庵）の洋行については、「洋行日記」（吉川半七発行、1888年）があり、「得庵全書」（鳥尾光、1911年）や「明治欧米見聞録集成」第15巻（1987年）に収録されているが、4月6日のナポリ着までの往路の航海中の記事しかないのが残念である。
- 23) 前掲「伊藤博文関係文書」4、394頁以下。
- 24) 三宅前掲書、285頁。
- 25) 坂野潤治「明治デモクラシー」（岩波新書、2005年）91頁。
- 26) 1887年7月5日付書簡（平塚篤編「伊藤博文秘録」原書房、1982年、原書は1929年刊行）。なお、小林和幸『政治家としての谷干城』（広瀬順昭・小林和幸編「谷干城関係文書解説目録」北泉社、1995年）24頁も参照。
- 27) 宮内庁編「明治天皇紀」六（吉川弘文館）775頁。
- 28) 以上、大沼前掲論文、676頁以下。
- 29) 小林和幸前掲論文、28頁。
- 30) 大山元帥伝編纂委員編「元帥公爵大山巖」（大山元帥伝刊行所、1935年）。なお、一行中の野津道貫による「欧米巡回日誌」全3冊（広島鎮台文庫、1886年）が刊行されており、これも前掲「明治欧米見聞録集成」第4巻（1987年）に復刻されている。

付表 谷千城・黒田清隆洋行旅程

谷 千城	黒田 清隆
86.02.05 農商工業視察のため欧州へ差遣命令	
86.03.13 横浜発	
86.03.20 香港着	
86.03.23 香港発	
86.03.26 サイゴン着	
86.03.29 シンガポール着	
86.04.10 アデン着	
86.04.15 スエズ着	
86.04.16 カイロ着	
86.04.17 ピラミッド見物	
86.04.25 マルセイユ着	
86.04.26 リヨン着、ついで夜中にパリ着	
06.05.09 鳥尾が来訪	86.05.10 転地療養のためシベリア遊歴を願い、聴許
86.05.21 鳥尾を訪問	
86.05.24 鳥尾を訪問	
86.05.25 鳥尾が来訪	
86.05.27 パリ発、ハーブル着	
86.05.31 ナント着	
86.06.06 スベール着	
86.06.07 スベール発、リヨン着	
86.06.11 リヨン発、ジュネーブ着	
86.06.14 ベルン着	
86.06.22 コンスタンス着	86.06.23 横浜発
86.06.24 ウィーン着	86.06.30 長崎発
86.07.07 ブダペスト着	86.07.07 ウラジオストック着
86.07.21 ウィーンに戻る	
この間、スタインからの講義を受ける	
86.08.11 ウィーン発	
86.08.13 ペテルスブルク着	
86.08.26 モスクワ着	
86.08.29 モスクワ発	
86.08.31 ウィーン着	
	86.09.28 モスクワ着
この間、スタインからの講義を受ける	86.09.30 ペテルスブルク着
	86.10.28 コンスタンチノーブル着
86.11.02 ベルリン着	86.11.19 アテネ着
	86.11.26 アテネ発、ピーレ港着、乗船
	86.11.28 プリンディシ着（同地で鳥尾に会う）、ローマに向かう
86.11.30 ドレスデン着	86.11.29 ローマ着、日本公使館を訪問
86.12.10 ウィーン着	● 86.12.10 田中不二麿宛書簡
86.12.20 コンスタンチノーブル着	86.12.12 イタリア皇帝に謁見
	86.12.16/17 議院を見学
	● 86.12.19 伊藤博文・井上馨宛書簡

駐伊公使時代の田中不二磨と訪伊日本人たち（鈴木）

	86.12.30 ヴェネチア着
87.01.07 ギリシャのピレー港に着	87.01.01 ウィーン着
87.01.14 ブリンディシに上陸、ナポリ着	
87.01.15 プッツオリなどを見学	
87.01.16 ポンバイを見物	
87.01.17 水族館・博物館を見学	
87.01.18 ナポリ発、ローマ着。田中公使らの迎え	この間、スタインからの講義を受ける
87.01.19 日本公使館を訪問、田中公使夫妻に面会	
87.01.20 田中公使とともに、外務卿を訪問	
87.01.21 ローマ法王庁を見学	
87.01.22 カタコンベを見学	87.01.26 ベルリン着
87.01.28 農業博物館を見学	
87.01.30 サンホール寺院を見学	87.01.31 パリ着
87.02.11 フィレンツェ着。3月下旬まで病気がち	87.02.07 ロンドン着
	● 87.02.16 田中不二磨宛書簡
● 87.03.19 田中不二磨宛書簡	87.02.25 リバプール着
● 87.03.20 田中不二磨宛書簡	87.03.08 ニューヨーク着
87.03.26 ピサ着、斜塔を見学	87.03.12 ワシントン着
87.03.27 ラ・スペツィア（軍港）着	87.03.25 シカゴ着
87.03.28 ラ・スペツィア発、ジェノヴァ、アレッサンドリアを経てトリノ（チュラン）着	
87.03.29 トリノ市街を散策	
87.03.30 武器庫を見学	87.03.30 サンフランシスコ着
87.03.31 パリに向け、トリノ発	
87.04.01 パリ着	87.04.02 サンフランシスコ発
87.04.16 ロンドンに向け、パリ発	87.04.21 横浜着
87.05.01 アイルランドのクンスランド着	
87.05.10 ニューヨーク着	
87.05.15 ワシントン着	
87.05.19 フィラデルフィア着	
87.05.22 ニューヨーク着	
87.05.26 シカゴ着	
87.05.31 サンフランシスコ着	
87.06.04 サンフランシスコ発	
87.06.23 横浜着	
87.07.03 条約改正案反対の意見書を提出	

\* 谷干城「洋行日記」・黒田清隆「環遊日記」から作成